

「流体としての ことば，文化，地域」

ウェルズ恵子

はじめに

研究分野をまたぐ学際的なこの連続講演会を構想した時、私たちには感覚的な共通認識がありました。ことばが現実の一部を作っているということ、その現実と手を結んで存在する現象を文化と呼ぶのだということ、そうしたことのすべてが、人間同士のつながりを基盤にした空間（地域）で生成するということが、です。また、「ことば」「文化」「地域」と呼ばれるものは、実体を確定できない上に相互に関係しながら変化し続けている。そしてその変化は、無秩序ではなくてなんらかの方向性と運動法則や分類可能な特質を備えている。だから、これを明らかにすることは今後の人文科学研究において、とても重要な課題なのだろう——その気持ちが一一致した時、「流体としての ことば，文化，地域」というテーマに行き着きました。共通感覚が共通の研究課題として立ち上がったわけです。

ここに掲載された講演は、一般の方々を対象に起草されたものです。ことばの流れや人の移動が引き起こすダイナミックな変化を、過去、現在、未来に意識を開いて追求しています。日常的な人間の表現活動を洞察し、すぐに見えるものとすぐには見えないもの、すぐに聞き取れるものとすぐには聞き取れないものを取り上げ、整理して提示しています。この連続講演会は、立命館国際言語文化研究所・ヴァナキュラー文化研究会と立命館大学文学研究科・英語圏文化専修との共催で、2014年12月から2015年3月にかけて実施されました。延べ約300人の方々にご参加いただきました。

